明石の史跡（４６）人丸社の筆柿

近世明石城下における「歯痛」の妙薬（民間療法）としては、明石七仏薬師の一つである、長林寺の本尊の薬師さんが所持する楊枝を咀嚼すれば、効能が発揮されるということは、以前に紹介しておいた。ところがここにもう一つ、歯痛に有効な療法とされるものが伝承されている。それは現在の柿本神社の神木「筆柿」に関するものである。

> むかし、柿本人麿が石見国から京の都へ向かう途中、明石に立ち寄りました。丘陵から見える明石海峡、淡路島の美しさに感嘆して、持っていた柿の種をここに植えました。そして「和歌の道が栄えるように、柿も育ってくれ」と祈ったのです。　この柿の木は年々大きくなり、実をつけましたが、筆の形に似ていることから、御筆柿と呼ばれるようになりました。この実を口にふくむと歯の痛みがとれ、妊婦がふところに入れていると安産だといわれています（『あかし昔ばなし』１２６頁）。

筆柿というのは、近世２００種類もあるという和産の柿の一つで、「長サ二寸半許、濶サ二寸弱ニシテ、頭尖リテ筆頭ニ似タ」るところから命名されたもので（重修本草綱目啓蒙／古事類苑植物部１．６１１頁）、別名「鹿心柿」（やまかき）ともいう（和漢三才図会／同書６１０頁）。石州人丸社の傍にあるのが名産とされ、まさに人麿が赴任地の石見から持参してきた柿は、石州産のものであった。

筆柿は、青くても渋みがなく、１０月には賞味することができたという（重修本草綱目啓蒙／同書）。初冬になると、歯痛に悩む者は柿を口に含み、妊婦はその幸せのために、たわわに実った筆柿を、そっと懐にしのばせる光景が、神社の風物詩になったことであろう。

柿本神社筆柿

日本歴史学会会員　茨木　一成